

## 〈生〉と〈死〉についての一考（Ⅰ）

— いのちの終章をどう生きるか —

村上 則 夫

### 構成

1. はじめに（第54巻第1号の展開内容）
2. 〈いのち〉を問い直す
  - 2-1. 〈生〉と〈死〉への思い
  - 2-2. 人間の「存在」をどのように考えるか
  - 2-3. 〈いのち〉の価値をめぐって
3. この世に〈生〉を与えられて
  - 3-1. 人生に求めるものは何か
  - 3-2. 人間として果たすべきこと
  - 3-3. 人間の「使命」とは— 〈いのち〉をどう使うか—
4. 人生の時間と現代人の〈死〉
  - 4-1. 〈いのち〉と時間
  - 4-2. 人間に与えられた時間
  - 4-3. 現代人の〈死〉の実情
5. 人間の〈いのち〉の長さを考える
  - 5-1. 人が〈死〉を恐れる理由とは何か
  - 5-2. 「長寿」への願望—長い〈生〉へのあこがれ—
  - 5-3. 本当に「不死」は「最善」なのか

### 1. はじめに

すべての人間は、〈死〉から逃れられない。

しかし、これまでは〈生〉と表裏をなす〈死〉、あるいは、〈生〉の先にある死後の世界というものがタブー視され、積極的に論じたり話題にすることは、「縁起でもない」とあえて口にすることが避けられていた感がある。

しかし、近年では、私たちの身の回りでも、しだいに「生と死」を書名とした書籍も目にするようになり、生と死をめぐる身体的、経済的、文化的及び社会的な問題などが広範囲に取り扱われるようになってきた。

そこで、筆者は、いま一度、〈生〉の原点に立ち戻って、私たち人間の〈生〉だけではなく、〈死〉を見つめ、その現実から逃げずに向き合い、どのようにこの地上生涯を終えていくのか、終えたいのか。どのようにその〈死〉に向き合い、後悔のない自分らしい人生の終章を過ごすことができるのか。このことを通して生き方を問い直し、思索し、静思する必要性を強く感じ、拙稿を著すことにしたしだいである。

なお、拙稿では、哲学、宗教学ないし医学・保健学などで取り扱っている〈生〉と〈死〉についての専門的な検討や考察を試みた内容ではなく、あくまで、ごく普通のありふれた、筆者の個人的なレベルの〈死に方〉—もっとも、交通事故や病気などで突然の死を迎えなければであるが—への願望やら遺言めいた内容に過ぎないことを、ひとことお詫びするとともに、少しでも〈死〉を見つめることを通して、みずからの人生の歩みについて、いま一度考えたいと願っている方の参考になれば幸いであると考えている。

## 2. 〈いのち〉を問い直す

### 2-1. 〈生〉と〈死〉への思い

高度情報社会とも称される現代では、いろいろな場面で私たちの要求や必要性とは無関係に、情報が大量にうみ出され、膨大な量の情報が私たちの社会に氾濫するという状況がある。現代に生きる私たちは、好むと好まざるとにかかわらず、このように容赦なく降り注ぐ情報の中で暮らしている。この現代的な状況をたとえるなら、“情報の森”の中で暮らし、あるいは、“情報の海”を泳いでいる、と表現することができる。

戦後日本において、漫画の第一人者として活躍した故手塚治虫氏の著した『ガラスの地球を救え』<sup>1)</sup>の中で、「なにが必要な情報か、ということですが、ぼくはとどのつまり、生命の尊厳を伝える情報が最も必要でかつ重要な情報だ」と指摘し、「政治的な規制もなく、自主的に、生命の尊厳と生きるということの価値を情報によって子どもたちに与える態度をとることが、ぼくたち大人の高度情報化社会に対する何よりの心構えではないか」とも述べている。

筆者の子どもの頃には、昔の中国（北宋）の政治家・歴史家・儒学者として知られる司馬温公（しばおんこう／司馬光ともいう）の「瓶割り」の話しを聞いたことがある。今日では、この興味深い中国の故事（＝昔からの言い伝え）は、日本の若者たちにほとんど伝えられていないように見受けられるので、簡単にこの出来事の

内容を記してみたい。

それは、温公の子どもの時の出来事である。温公が大きくとても高価な水瓶のあたりで友達数人と遊んでいたところ、友達の一人が誤って水瓶の中に落ちて、いまにもおぼれそうになる。そこで、温公は水瓶に落ちた友達を助けるために、父親から叱られるのを覚悟して石を振り上げてその瓶を割り、水瓶に落ちた友達の命を救ったのである。それを聞いた父親は、叱るどころか温公をほめたたえ、改めて人間のいのちはどのような高価なものよりも大切だということを教えたという内容である。

この出来事が故事として、すなわち、後世に伝えるべき大切な情報として語られ続けているのは、当時、中国では、水を貯蔵する古く大きな水瓶は高価で貴重品であったが、そのような品よりも人間のいのちの方がはるかに尊いということを強く訴える目的があったことは容易に理解できよう。

しかしながら、一度、この地上に〈生〉を得た人間として、いつかは、その〈生〉を終える時がくる。〈死〉は、私たちの人生でただ一度きりの後戻りできない絶対的で究極の出来事である。私たち人間は、人として愛され愛しながら幸福を求めてこの地上生涯を歩むが、誰もがいつかは必ず死ななければならない存在でもある。

〈死生学〉の実践としての「死への準備教育」(death education)を提唱したドイツ人で上智大学名誉教授のアルフォンス・デーケン氏(Alfons Deeken)は、みずからの著書『死とどう向き合うか』の中で、「私たちは人生において、いつかは身近な人々の死と自分自身の死に直面せざるをえません。死そのものは、前もって個人的に体験することはできませんが、死を身近な問題として考え、生と死の意義を探求し、自覚を持って自己と他者の死に備えての心構えを習得することはできると思います。そして、人生の意義は、究極的には死をもって決定づけられ、完成されるものと言えましょう<sup>2)</sup>と述べている。

近年、医学分野の進展は目覚ましく、医療技術は驚くほどに高度で優れており、かつてはとうてい根治不可能とされていたケガや病気などもかなりのものが克服されつつある。

それでもなお、〈死〉というものの前に、人間は完全に無力で勝利なしの完敗といわざるをえない。これまで「なぜ生まれ、なぜ死ぬのか」という問いに迷いに迷いながら人間は生き続け、これまで数多くの人間がその答えを模索し、探究し続けているが、すべての人間が得心する、この問いへの回答はいまもってなされていない。しかし、だからといって、そのことが人間のいのちの尊さや価値を否定する根拠とはならない。あらゆる意味において、いのちは人間存在の根本であり、いのち

なしに「なぜ生まれ、なぜ死ぬのか」という問いは意味をなさないのである。

なお、近年、日本でも、〈死の質〉という言葉が語られるようになってきた。アメリカで1980年代から使われているクオリティー・オブ・デス（Quality of Death；QOD）の意味として語られる言葉であるが、日本ではまだ広く一般化していないために、その意味や内容などについて理解がえられる段階までには至っていないように見受けられる。このQODに対しては、本号ではなく、次号以降で筆者なりの思いを記す予定である。

## 2-2. 人間の「存在」をどのように考えるか

すべての人間の人生の始まりは、いのちの誕生からである。

イギリスの政治家・小説家として知られる初代ビーコンズフィールド伯爵ベンジャミン・ディズレーリ（Benjamin Disraeli, 1st Earl of Beaconsfield）は、「人は自分自身のことをいくらかでも知っていない限り、人類全体のことを何も知ることはできない」という名言を残しているが、現在、推定約76億5千万人が存在している世界中の中で、私たち一人ひとりの人間は、誰にも取りかえることができない、たとえようもなく高価な存在であると筆者は主張したい。

すなわち、誰もが、生まれながらに高価で尊い、他の誰にも代えることのできない価値をもった「かけがえのない存在」であり、決して、何かと交換可能な消耗品、使い捨て製品などではないのである。

しかも、無条件に愛されるべき存在であり、誰からも愛されるために生まれてきたのである。それは、なにか特別な能力や才能があるから価値があるのでも、社会的に有名で偉いものだから愛されるのでもなく、“そのままの存在”に価値があり、かつまた、無意味な、無目的な人生などあり得ないということである<sup>3)</sup>。

それは、人間というものの存在自体の成り立ちからみても明らかである。今日、200ほどある世界の国々の国家予算、そして最先端の研究や技術開発に関わっているよりすぐりのあらゆる研究者や技術者などを集めても、人体を構成している細胞の一片さえ、何もない「無」からつくりあげることはできない。機械の部品などと違って、人間の手によっては、科学的に「無」から「有」を、無機的な材料から尊いいのちを作り上げることは不可能なのである。

この地上に天地がつくられて以来、どれだけの生命、どれほどの人間が誕生し生きてきたであろうか。「いま」生きている一人ひとりの人間は、そのような長いながい歴史の流れの中で、そしてまた、「いま」から始まる未来においてさえ永遠に存在することのない、ただ一人の人間なのである。

一般的に、人間の男性と女性が愛し合い、健康な男性が愛する女性に放出する精液には、約2億から6億の精子が含まれていることが知られている。どの精子も、貴重な父親の遺伝子を運び、高速移動を目的とした形をしているとされるが、女性の卵子を受精させるのは、約2億から6億の精子の内のただ一つの精子のみなのである。

これを日本人の立場から考えてみよう。今日、日本の総人口は1億2,615万人(2019年4月1日現在概算値／総務省統計局)である。約2億から6億の精子の内のただ一つの精子というのは、少なくとも、日本の総人口をはるかに超した数のたった一人、そして多ければ4倍以上の数のたった一人ということになる。確率でいえば、途方もない割合の中で、一人の人間はこの世に〈生〉を受けたのであり、人間の〈生〉は、まさしく奇跡としかいいようがないのである。

世界中には、名前、生年月日、血液型、皮膚の色や髪の毛の数、足の大きさや身長・体重などは、ほぼ同じ人間が存在しているかもしれない。しかし、人間の身体全体をつくる細胞の数は同じ約60兆個でも、まったく同じ〈こころ〉や〈精神〉をもった人間はどこにも存在しない。さらに加えていえば、ただ約60兆個もの細胞を機械的に寄せ集めただけでは、いのちを持った「生きた人間」にはならないし、細胞の単純な寄せ集めの集合体では、人間のやさしいこころや豊かな感情の存在は今日でも説明不可能なのである。

そこに、一人ひとりの〈生〉には、その人間が存在する大きな意味があるといっ  
てよいだろう。

### 2-3. 〈いのち〉の価値をめぐって

一人ひとりの人間は、誰もが、たとえようもなく価値をもった尊い存在であるかについては、次のような出来事も参考になろう。

世界には、人間の手によるすぐれた製品や作品などが数多く存在している。

いまから30年以上前の出来事で、記憶にある方もおられると思うが、1987(昭和62)年3月に、日本の大手保険会社・安田火災海上(現：損保ジャパン日本興亜)がロンドンの絵画競売において、オランダの画家で有名なフィンセント・ファン・ゴッホ(Vincent van Gogh)晩年の作品である『ひまわり』という作品を約58億円(当時のレート／この時点では史上最高)という破格の値で落札したことがあった<sup>4)</sup>。(ちなみに、この作品は、現在、東郷青児記念 損保ジャパン日本興亜美術館に常設されている)。

では、なぜ、このような途方もない値段で『ひまわり』という作品が落札された

のであろうか。いろいろと考えられる要因は存在するだろうが、何ととっても最大の要因は、その作品がゴッホ自身の手によって描かれた〈本物〉のゴッホの絵だからといえるだろう。

現代の科学技術と技法を用いれば、色彩や形状などおよそ素人の目にはまったく見分けができないほどに本物と寸分違わない、ゴッホの『ひまわり』そっくりのものを制作することは容易であろう。しかし、そのようにして作られた偽物の絵画、すなわち、贋作に大金を支払うなどということはかなり馬鹿げた行為といわざるをえない。絵画そのものよりも、絵画をおさめた額縁の方が高く売れそうである。そしてまた、ゴッホ自身の描いた本物の作品であれば、たとえば、東京の武道館に飾られようが、地方の市町村の小さな公民館に飾られようが、その価値はいっさい揺らぐものではない。『ひまわり』がとても珍しい特技や演奏をしなくても、ただそこに「あるだけ」で、すなわち、本物の作品がそこに「存在するだけ」で素晴らしいのである。

一人の人間が作り上げた本物の作品でさえ、このように途方もない値段がつくのである。ましてや、人間＝本物の存在であれば、何物にもかえがたい高価で尊いのは当然というべきであろう。

その価値は、市場などで金銭取引をすることのできる価値などではない。五体満足な人間でも、たとえその身体にながしかの障がいがあっても、あるいはまた、大きなケガや病気などで寝たきりの状態で日々の生活を過ごさなければならないとしても、まったく同じ高価な価値を持った存在であり、そこに何ら価値の差はないのである。

したがって、たとえ、度重なる人生の困難や苦難、そして到底耐えられないと思われるほどの試練にあって、心が弱まり、泣きそうで、しおれてしまいそうになっても、人間としての自分自身の価値を見失ってはいけない。

ある高校生の感想文に、「おばあちゃん、おじいちゃんが生きるのをあきらめていたら、いまの私がないということに気づいた時、心からありがとうという気持ちと尊敬の念がわいてきた」という内容の文面がある。

人間のいのちは、自分自身のものである。しかし、自分だけのものではない。「いま」存在する一人ひとりのいのちには、過去に生きた途方もない人たちのいのちが含まれ、かつまた、未来に続くいのちをもやどしているといえるだろう。肝臓移植を受けた経験をもつ野村氏は次のように述べている。「私は生きている。でもこのいのちは『わたし』だけのものではない。隣人と、他者と、共有するいのちでもある。そのいのちの『わたし』の部分、わたしは生きている。だからわたしは生き

るとき、『わたし』を超えたいのちを生きており、いわば、そうしたいのちの責任を預かって生きている』<sup>5)</sup>と。

自分で自分の価値を減じたり引き下げるのは、尊い価値を持った人間としての悲しく誤った行為なのであり、どんな時、どんな状況にあっても、人間としての価値は変化しないことを強く意識しながら人生を歩むことが重要であろう。

### 3. この世に〈生〉を与えられて

#### 3-1. 人生に求めるものは何か

ユダヤ系ドイツ人で、1945（昭和20）年3月にベルゲン・ベルゼン収容所でのちを落としたアンネ・フランク（Annelies Marie Frank／『アンネの日記』の作者）は、「だれもが幸福になりたいという目的を持って生きています。生き方はそれぞれ違って目的はみな同じなのです」という言葉を残している<sup>6)</sup>。

また、『戦争と平和』や『アンナ・カレーニナ』などの作品で世界的に知られ、文学・政治・社会などに大きな影響を与えた著名なロシアの文豪レフ・トルストイ（Lev Nikolayevich Tolstoi）は、みずからの著書『人生論』において、「生命とは、幸福になろうとする欲求である。幸福になろうとする欲求こそが、生命である。すべての人が生命をこのように理解してきたし、いまも理解しているし、これからもずっとこのように理解するであろう。したがって人間の生命とは、人間の幸福を得ようとする欲求であり、人間の幸福を得ようとする欲求が、人間の生命である」と記している。『宝島』や『ジキル博士とハイド氏』などで知られる有名なイギリスの小説家・冒険小説作家・詩人のロバート・ルイス・スティーヴンソン（Robert Louis Stevenson）にいたっては、「幸福であるという義務ほど、私たちが低く評価している義務はない」と述べている。

一般的に、〈幸福〉という言葉は、他の興味深い幾つかの言葉と比較しても、圧倒的に魅力を秘めた言葉である。〈幸福〉という言葉は、哲学的な一つの規定としては、「意志がその目的に完全に到達して、そこに十分な満足を感じること」とされているが、より簡潔には、「望みが満ち足りて不満のない状態」と捉えることができる言葉である。私たち人間は、誰しも、この地上生涯において、何も得ずにただ生存するだけではなく、ここからの幸福、「幸せに満ちた生涯」を求めてやまないのではないだろうか。

私たち人間の多くが、日々新たなものに熱意を持って、その困難の壁を乗り越えようとチャレンジしていくのは、その果てに絶望と不名誉が待ち受けているからで

はなく、満足感（充実感）や幸福感を得ること、と明言しても大きな誤りとはいえないだろう。一生、不幸で涙の生涯を送らなければならないとしたら、人間の人生とは、なんとむなしく悲しいことであろうか。

どのような時代においても、人間であれば、スティーヴンソンのごとく、誰もが幸福になることは、“権利”ではなく、“義務”であると考えたいのではないだろうか。すべての人間は、幸福を心から望みながら生き、毎日、心から幸せを感じ喜びに満たされながら生きたいと願っているはずである。

### 3-2. 人間として果たすべきこと

『広辞苑』によれば、「使命」という文字の意味を「使いとして命ぜられた用向き。使いの役目。使者。自分に課せられた任務。天職。」と解説している。

ここでは、学問的に厳密な解釈や字義から離れて、「使命」という文字を「いのちを使う」と筆者なりに簡潔に解釈してみたい。

日本においては、「平成」から「令和」へと新しい時代を迎えたが、今日、私たちが生きている時代は、その未来が明確に予測できないほど日々変化し、必ずしも平穏無事で安定した時代とは言いがたい。残念なことに、現代では、ややもすると、一人ひとりの人間の存在そのものやあり方が軽視されたり、現実の社会の姿に不満があっても、それを変えようとする夢や希望すら失われがちな状況すら垣間みられる。

やや余談の域をでるものではないが、人間の社会は動物の社会と比較して、優位にあるすぐれた社会といえるのだろうか。

ある書籍の中で、細胞分裂を繰り返して増殖する単細胞生物の「ゾウリムシ」と「野生のオオカミ」の生態に関する記事を目にしたことがある。

それによると、捕食性であるゾウリムシは餌となるバクテリアなどを食べて大きくなると、みずからの体をちぎって分裂しながら増殖する。このように細胞分裂を繰り返して、しだいに増殖していくことになるが、餌となるバクテリアなどが不足するとどうなるか。人間の世界において食糧不足が起こると、国や地域によっては、多かれ少なかれ、相互に争奪戦の可能性もあるが、ゾウリムシの世界ではそのようなことがないという。

ゾウリムシは、餌を食べた後で排せつをするが、排せつ物の濃度をキャッチする、いわゆる「センサー」が体の中に内蔵されており、環境での排せつ物濃度が一定のレベルを超えると増殖するのを中止する。センサーが仲間の数が増え過ぎたことをキャッチし、餌がなくなりそうな時にはゾウリムシ全体が食べることをやめて、増



殖もやめてしまうのである。それは、自分のいのちだけを守るために食べつづけるのではなく、ゾウリムシ社会全体の種の保存と生き残りのために、全体がいっせいに食べるのをやめたのであり、再び、バクテリアなど餌が増えると捕食を再開して分裂を繰り返し、分裂して広がっていくというのである。

一方、野生のオオカミは、決して仲間同士の相手のいのちを奪う殺し合いをしないといわれている。唯一の例外といえるのは、オオカミの縄張り争いの時で、自分の縄張りに他のオオカミが来た時には決闘をする。しかし、その決闘でも、実際に向き合った瞬間にどちらが強いのか、ほぼ判別がつかず勝ち目のないオオカミのほうは、自分の急所を見せるポーズをとるといふ。このポーズをとられると、優位に立つオオカミは、相手にかみつくことができないように本能的に歯止めがかけられ、致命的な行為にまで及ばないといわれている。それは、仲間同士ではいのちを奪う殺し合いができないように、はじめから本能的にプログラムが書き込まれているというのである。

むろん、筆者は動物学や生物学の専門家ではないことから、その信憑性を科学的に証明することは不可能であるが、動物の社会について考える興味深い事例であることには変わりない。

その点、人間の社会とはといえば、世界に目を向けると、貧困、インターネットを利用しての詐欺行為や人格攻撃の増加、凶悪犯罪の増加、多発している民族紛争(闘争)、飢餓、人権侵害、あるいはまた、地球温暖化や自然環境破壊など、一見、平和で豊かな社会であるかにみえる現代の社会は、その実、現代に生きる人間にとって、未来の見えない、しっかり夢が語れない不安がひそんだ社会、幸福を求めても、真の幸福を味わうことのできない「生きにくい社会」になっているといえるのではないだろうか。

日本の実業家で日本航空名誉会長の稲盛和夫氏が著した『生き方』<sup>7)</sup>は、混迷を極め、先行き不透明な「生きにくい社会」を生きている私たちに対して、人間の「生き方」というものを真正面から捉え、根幹から見据えて、人間の生きる意味と人生のあり方を根本から問い直した内容となっているが、この著作の中で、稲盛氏は、「富」ではなく、「徳」、すなわち「利他の心」による国づくりを目指すべきであり、「徳」を国家理念の土台として世界に接していく国家となった時、日本は国際社会から真に必要とされ、尊敬される国になるはずだ、と説いている。

このような時代の中に生きて、もし、現代の社会を「生きにくい社会」とするならば、その現実をただ嘆き、不満と後悔の内に、この地上生涯を終えることが望ましい生き方とは誰も考えないだろう。

では、一体、私たちは何をすべきか。人間として〈生〉を受けた以上、果たすべき「使命」があるのではないだろうか。

次節以降では、私たち人間には、何らかの「使命」というものが与えられているという考えのもとに、自分の大切な一つだけのいのちを何に、どのように使うかについて、筆者なりに思案してみたい。

### 3-3. 人間の「使命」とは—〈いのち〉をどう使うか—

では、一体、私たち人間の「使命」とは何か、すなわち、自分の大切な一つだけのいのちを何に、どのように使うかを考えてみることにしたい。

もちろん、自分の大切な一つだけのいのちを何に、どのように使うかはまったく一様ではない。10人いれば10通りの、100人いれば100通りのいのちの使い方があろうし、他人のいのちを自分が使うわけにもいかない。

たとえば、「12色の色鉛筆」を例にとって考えてみることにしよう。12色の色鉛筆の中でも、よく使用する色鉛筆は短くなっているが、白色の色鉛筆のように、あまり使われない色鉛筆は長いままになっている。しかし、だからといって、決して「無用なもの」ではなく、たとえ、一度しか使わなくても、その色鉛筆もなくてはならない色鉛筆なのである。それは、すなわち、「すべての色鉛筆に、その色鉛筆にしかできない使命がある」ということである。人間もこの色鉛筆と同様に、その人間にしかできないこと、その人間だから果たさなければならない使命があるといっただいではないだろうか。

かくして、自分のいのちをどう使うかは、それぞれの考え方にゆだねざるをえないが、筆者は、「愛し愛され、他人のいのちを守り、寄り添うこと」に自分のいのちを使えたらという願望をもっている。この「寄り添う」という言葉は、「共感する」という言葉に言い換えてもよいだろう。

相手に「同情する」という言葉も、また「共感する」という言葉も、非常に思いやりのある言葉であるが、相手に「共感する」という言葉のほうが、より相手の立場に近づこうとする感情であろう。「共感する」とは、相手の苦しみや悲しみなどを自分自身のこととして感じ、一緒に重荷を背負いながら相手と一緒に静かに歩む姿を想起させる。

医師の柏木哲夫氏が著した『生きること、寄りそうこと』という著書の中に、「深い悲しみを背負って生きていくためには、そばにそっと寄りそってくれる人が必要である」<sup>8)</sup>と述べている。確かに、人間は他人の深い悲しみや苦しみを丸ごと背負うことはできないものの、そばにそっと寄りそって、同じ空間を共にすることはで

きよう。いや、そうありたいと思い、そのようにありたいものである。

「寄りそう」という点に関して、柏木氏の同書に、次のような実話が掲載されているので簡単に紹介し<sup>9)</sup>、この節を閉じることにしたい。

それは、ある航空会社が運航している航空機内での出来事である。

生まれつき、かなり重度の身体障がい・精神障がいの両方を持った息子をずっと介護してきた両親の実話である。この両親の一生は、ほぼ息子の介護についやされているという状態の中で、その息子が40歳のときに風邪をこじらせて肺炎になり、急に亡くなってしまう。息子の死にショックを受けて悲しみ、家に一年近く閉じこもってしまうが、息子のためにも少しずつ外へ出るようにしようということで、亡くなった息子の写真を額に入れて、二人で旅をするようにしたという。そして、景色がいいところなどに来ると、カバンから息子の写真を取り出したりして、まるで三人でいるような感覚で旅を続けていた。

ある時、空の旅で、「左の席から富士山がとってもきれいに見えます」というサービスの機内放送が入った時、母親がすぐにカバンから息子の写真を取り出して窓際においたところに、ドリンクサービスの客室乗務員がまわってきたことから、この二人はジュースを注文した。その時、二人にジュースを渡した客室乗務員は、窓際に置かれた写真に気づき、この夫婦がどのような状態で旅をしているのかを知り、親の愛に非常に感動したという。

そこで、ジュースを渡した客室乗務員は、もう一つコップにジュースをついで、二人の目の前に差し出し、「窓際の方にも、おひとつどうぞ。」と言葉をかけたのである。母親は、その言葉を聞いて本当に嬉しくなり、その場で大粒の涙を流したという。そして、空港に到着してすぐにその航空会社の事務室に行き、「今日、機内でこんな素晴らしい体験をしました。云々」と褒めたというのである。

このような客室乗務員の姿勢は、まぎれもなく、大事な息子を亡くした二人の気持ちに「共感した」行為であり、見事なほどに「寄りそう」ことの大切さを教えてくれる対応でもある。柏木氏によれば、「寄りそう」という場合、専門的な力よりも、人間的な力が要求される。人間に寄りそうためには、時として、自分の考えや生き方を表に出さず、ただひたすらにその人間に寄りそう人間的な力が要求される、とも指摘している。人間的な力とは、すなわち、「人間力」であろう。この「人間力」は、一人ひとりから立ちのぼる「人としてのかおり」ではないかと筆者は考えている。

現時点において、一人ひとりの人間が、誰にも代えることのできない尊い存在であり、そのことが真に尊重される社会、それはすなわち、未来への希望や夢を自由

に語り行動することができ、「愛や慈悲に満ちた社会」を理想的な社会のひとつの姿と考えている筆者にとっても、ただひたすらに苦難と困難に涙する人間に寄りそう人間的な力をいかに身に付けるかということは、筆者自身の大きな課題のひとつでもある。

## 4. 人生の時間と現代人の〈死〉

### 4-1. 〈いのち〉と時間

ノートルダム清心学園理事長の職などをつとめた、故・渡辺和子氏の著作の中に、「時間の使い方は、そのままいのちの使い方」という文言がある<sup>10)</sup>。

若い年代の時は、時間など無限にあると勘違いして日々の生活を過ごしていたものだが、年を重ねて、みずからの「古い」を感じた時、この「時間の使い方は、いのちの使い方」という言葉の意味がわかりはじめる。逆に言えば、「時間の使い方は、いのちの使い方」という言葉を理解できるようになった時、その時こそが「古い」への歩みを始めた時でもあるような気がする。

しかし、老いてきたからといって、精神的にも身体的にも健康な人間が、毎日、〈死〉に対して後悔のないように準備を整えたり、その心構えをもって、愛する人の〈死〉や自分の〈死〉に覚悟を決めている人間は多くはないかもしれない。なにしろ、毎日、四六時中、〈死〉や死後の世界について深く考えるわけにはいかないであろうし、食事やスポーツの時まで、あれこれ死に方を思いめぐらせるのは、どんなに考えても楽しくもなく、幸せでもないだろう。

確かに、〈死〉や死後の世界を考えてばかり過ごすわけにはいかないが、誰もが、いつかは、必ず死ぬ時がくるという現実を真に受け入れて、いま一度、〈生〉の原点に立ちもどり、自分の人生の最も重要な時といえる死まで、どのようにして、積極的に、かつ大切に生き抜くか、死という現実を身近なこととしてみつめながらも、みずからの生き方を、静思することは大切であると考えるのである。

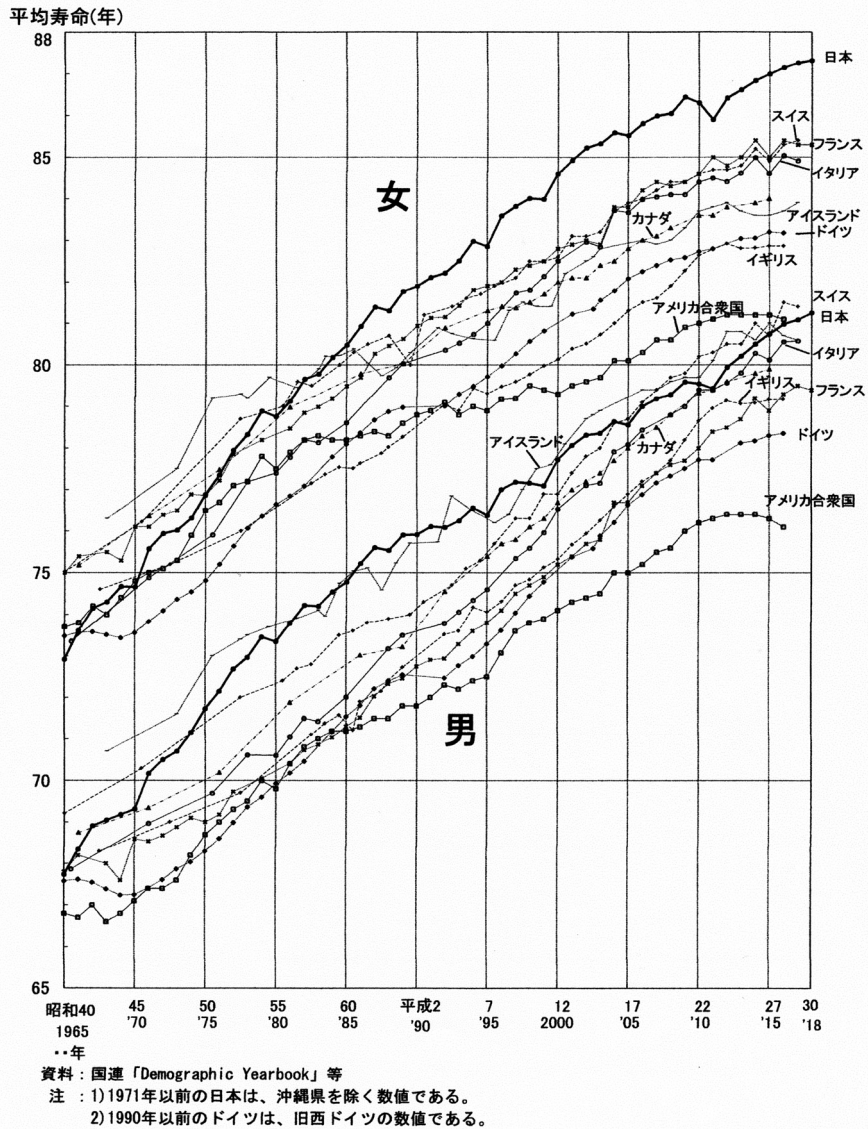
かつて、日本人の戦前の平均寿命は、50歳未満であったといわれているが、既述のごとく、現代における医学の発展、また実際的な医療技術はきわめて高く、かつては「不治の病」といわれた根治不可能とされた病気などもしだいに克服され、いまや日本人の平均寿命は世界の上位に位置している。

ご承知のとおり、日本では、数年前からテレビや新聞などのメディアでも「人生100年時代」という用語を用いるようになり、日常的に、「人生100年」という言葉を頻繁に耳にするようになった。それは、日本人の平均寿命及び健康寿命が延びる

中で、いまや100歳まで生きることを前提に自分自身の人生設計を描く時代がきたということである。

2020（令和元）年7月30日に厚生労働省が発表した「平成30年簡易生命表」<sup>1)</sup>によると、日本人の平均寿命は男性81.25歳と過去最高を更新し、女性の方は87.32歳となり過去最高を更新している。日本の平均寿命ののびは、主要国の中でも上位に位置し、他の主要国を明らかに引き離している（第1図参照）。また、同省は、同

第1図 主要国の平均寿命の年次推移



（出所）厚生労働省「平成30年簡易生命表の概況」

<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life18/index.html> より。

年9月13日に、100歳以上の高齢者は全国で7万1,238人にのぼり、前年から1,453人増え、49年連続で過去最高を記録して、初めて7万人を突破したとする調査結果を明らかにしている。男女別では、女性が全体の6万2,775人と88.1%を占め、都道府県別にみると、人口10万人当たりの100歳以上の人数は高知県が最多（101.42人）で、次いで鹿児島県、島根県、鳥取県及び山梨県といった順位になっている。

現在、日本の最高齢者は女性で、福岡市東区在住の田中力子（かね）氏である。田中氏は1903（明治36）年1月2日生まれの117歳で、世界最高齢者としてギネスに公式認定されている。田中氏は、何度か大病をわずらった経験があり、30歳台でパラチフスに感染、45歳ですい臓がん手術、76歳で胆石の除去手術、90歳で白内障の手術、さらに103歳で大腸がんの手術を受けていると伝えられていることから、その生き方にはかなり驚かされる。

日本の国立社会保障・人口問題研究所の将来人口推計によると、日本人の総人口はしだいに減少するなか、100歳以上の高齢者は今後も増え続け、2025（令和7）年には13万3,000人、2035（令和17）年は25万6,000人、2050（令和32）年には53万2,000人にのぼると予測しており、先進国の中でも文字通りのトップクラスの高齢化傾向を示している。

さて、このように、人間の寿命は延びつつあり、誕生から地上の生涯を終えるまでの時間はずいぶん長い。人間が長く生きようになった大きな要因の一つは、やはり、人間の生活環境が向上し、医学や医療技術が進歩したことは否定しえないが、筆者は、それは大きな要因ではあっても、それがすべての要因ではないと考えている。

#### 4-2. 人間に与えられた時間

この項では、短命な生き物として広く知られている「カゲロウ」（節足動物門・昆虫綱・カゲロウ目）と「ミノムシ（オオミノガ）」（節足動物門・昆虫綱・チョウ目・ミノガ科）の生態について簡単に紹介してみよう<sup>12)</sup>。

一般的に、“カゲロウのようだ”と言えば、短く、はかないいのちを象徴する表現といえる。確かに、カゲロウは弱々しく、成虫になって一日で死んでしまうといわれているが、実際には、成虫になると数時間しか生きられず、まさしく「短く、はかないいのち」のようである。

専門家によれば、カゲロウにとって成虫というステージになると、餌を食べるための口も退化して失われ、餌をとることもせず、子孫を残すためのものでしかないという。限られた時間の中でカゲロウたちは交尾を行い、交尾を終えたオスたちは

その生涯を終え、メスたちは水の中に新しいいのちを産み、自分のいのちを落とし  
ていくという。それが、一夜での出来事といわれているから、まさしく、カゲロウ  
の生涯ははかなく短いいのちといってよいだろう。もちろん、自分が水の中に産ん  
だ子どもたち（小さい幼虫たち）の姿を見るわけではなく、子育てをするわけでも  
ない。一夜のうちに、交尾をして、水の中に卵を産み、その一生涯を閉じることに  
なる。

他方、ミノムシは、枯れ葉や枯れ枝で巣を作り、その中にこもって暮らしている。  
このような生態が、粗末な蓑（みの）を着ているように見えることから「ミノムシ  
（蓑虫）」と名付けられたという。

このミノムシの正体は、ミノガという蛾（が）の幼虫であり、冬になる前に、蓑  
を枝に固定して蓑の中で冬を越すのである。やがて、冬を越して春になると、ミノ  
ムシは蓑の中でさなぎになり、成虫となって蓑の外に出てくるが、蓑の外に出てく  
るのはオスのミノムシだけである。メスの方はといえば、春になっても蓑の中から  
出てくることはなく、蓑の中でさなぎになり成虫になるが、その後も蓑の中に留ま  
り、頭だけを出して成虫となったオスのミノムシをフェロモンで呼び寄せながら、  
パートナーであるオスが飛んでくるのをじっと待ち続ける。成虫になっても蓑の中  
に留まるメスは、はねや足もなく、やがて、交尾を終えたメスは、蓑から出るこ  
ともなく、その蓑の中に卵を産み、静かにその一生涯を終えるという。むろん、カゲ  
ロウと同じく、みずから産んだ子どもたち（小さい幼虫たち）を見ることもなく、  
子育てもしない。春になれば、蓑の中で卵からかえった幼虫は、産まれた蓑から外  
にはい出して糸をたらし、風に乗って飛ばされていく。そして、新たな土地で新た  
なミノムシたちの生涯が始まるのである。

以上、カゲロウとミノムシ（オオミノガ）の生態について簡単に紹介してみたが、  
このような生き物と比較して、確実に私たち人間の平均寿命は極めて長い。とりわ  
け、多くの生き物が産卵を終えて死にゆくか、短い子育てを終えて死ぬ場合が多い  
のに比べて、人間の方は出産、そして子育てを終えて、なお数十年を生きていくこ  
とになる。

筆者は、この地上に生きている他の生き物とは違い、このように人間が長く生き、  
生かされているということは、そこに、一人ひとりが、この世で長く生きる意味や  
意義、あるいは、長く生きなければならない、何らかの役割や使命があるからでは  
ないだろうか、と考えている。

この世の〈生〉の時間だけが長くなっただけで、そこに、何の意味も意義もなく、  
あるいは、生きているだけの役割や使命もないとは、どうしても考えられないので

ある。一人ひとりの人間は、この世での〈生〉の時間は異なるものの、一人ひとりに、誰もがそれぞれ、その人が生きている、生かされている意味や意義があり、その人にだけ与えられた役割や使命があるという考えに立てば、その与えられた役割や使命を見出し果たすまでは一むろん、多くの場合、満足のゆく100%果たせることは不可能であるとはいえず、生き続けることが人間に求められていると考えている。

筆者は、2年ほど前に、人間の〈誕生〉から〈死〉までの一生を自然界の「四季」(four seasons) — 人生の〈春〉、〈夏〉、〈秋〉、〈冬〉の季節 — にたとえて、人生の四季折々の意味、そして折々の季節において直面する課題や大切にすべき事柄などについて散策をするかのごとく思索し簡潔に整理して拙稿をあらわしたことがある<sup>13)</sup>。

私たちの多くは、自分が歳を重ねること＝歳をとることを心から歓迎したり、面白いと思う人は少ないかもしれない。しかし、誰でもない、自分自身の人生をよりよく、〈ていねいに〉生きるためにも、春の季節でもなく、夏の季節でもなく、人生の秋の季節にこそ味わうこともあろう。

この秋の季節は、子どもの出産を終え子育ても一段落し、これまでとは違って日が暮れる時間も急にはやくなってきたと感じる時でもあるが、この季節はみずからの人生の集大成を熟考する期間を指すといってもよい。それは、他の生き物が味わうこともない、人間だけが過ごすことのできる、特別な季節と捉えてもよいだろう。〈秋〉の季節には、しっかりと自分磨きをするのも素晴らしいことである。若い時のようにいつもあくせくしてあせることもなく、あまり結果にこだわることもなく、心穏やかに楽しむもの（こと）があれば、日々の生活はより一層楽しく過ごすこともできるように考える。

そして、人生の終章にあたる〈冬〉の季節は、これまでの長い自分の人生をもう一度振り返り、自分の人生を丁寧にまとめていく過程を通して、他の誰にも代えることのできない大切な自分の一生の意味や意義を再確認し、〈死〉に向き合う期間を指すといってもよい。この季節こそ、拙稿の副題ともなっている「いのちの終章をどう生きるか」を考える季節でもある。

#### 4-3. 現代人の〈死〉の実情

筆者個人としては、〈死〉に執着せず、〈死〉をも恐れない、という昔の武士のような気持ちで毎日が過ごせたらどんなに良いだろう、と考えたいが、それは、まだ完全な死を自分自身のことではなく、他人の出来事としか考えていないからである



う。

さて、一体、人間というのは、どのような死因でこの地上生涯を終え〈死〉に至るのであろうか。

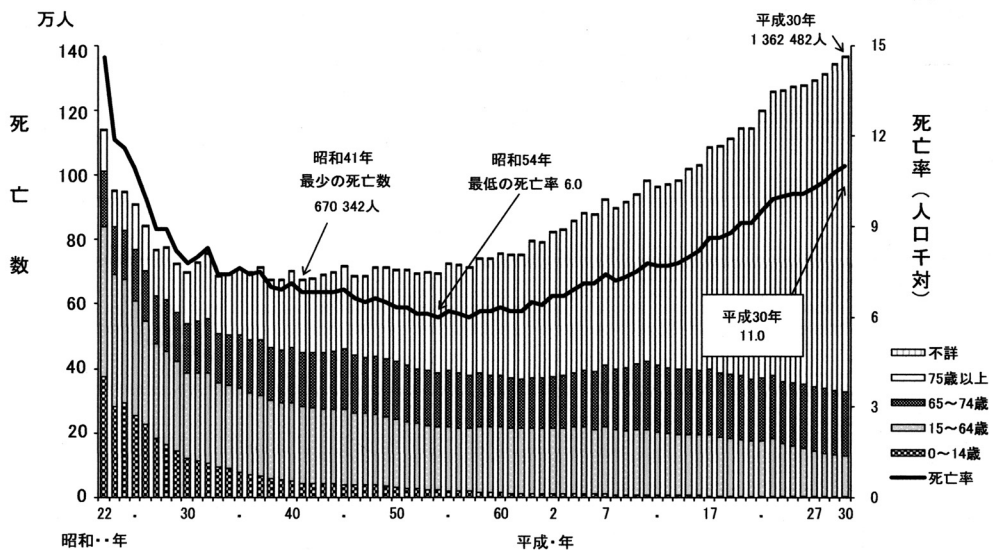
以下では、日本の厚生労働省が公表している「人口動態統計月報年計（概数）の概況（平成30年）」<sup>14)</sup>から、幾つかの興味深い指標をひろってみよう。

厚生労働省の「人口動態統計」によると、2018（平成30）年の1年間の出生数は91万8,397人で、前年の94万6,065人より2万7,668人減少し、出生率（人口千対）は7.4で、前年の7.6より低下している。他方、死亡数は136万2,482人で、前年の134万397人より2万2,085人増加し、死亡率（人口千対）は11.0で、前年の10.8より上昇している。

第2図は、日本人の死亡数及び死亡率の年次推移をあらわしたものであるが、死亡数の年次推移をみると、和暦でいえば昭和50年代後半から増加傾向となり、2003（平成15）年に100万人を超え、2016（平成28）年より130万人台となっている。なお、75歳以上の高齢者の死亡数は、昭和50年代後半から増加しており、2012（平成24）年からは全死亡数の7割を超えている。

次の第3図と第4図は、主な死因の構成割合と死因順位別死亡数・死亡率をあらわしたものである。この第3図と第4図からも明らかに知れるように、2018（平成

第2図 日本人の死亡数及び死亡率の年次推移



（出所）厚生労働省「平成30年（2018）人口動態統計月報年計（概数）の概況」  
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai18/index.html>  
より。

30)年の死亡数を死因順位別にみると、何といても第1位は「悪性新生物〈腫瘍〉」となっている。

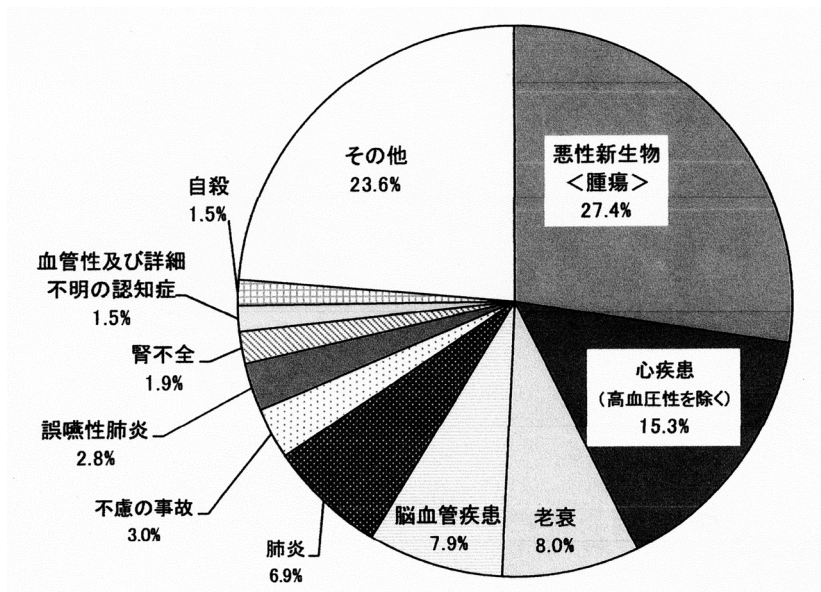
「悪性新生物〈腫瘍〉」による死亡数は37万3,547人で、2018（平成30）年の全死亡者に占める割合は27.4%となっており、全死亡者のおよそ3.6人に1人は悪性新生物〈腫瘍〉で死亡していることになる。これを年次推移的にみても、悪性新生物〈腫瘍〉は一貫して増加しており、1981（昭和56）年以降死因順位第1位となっている。

次いで、第2位は「心疾患（高血圧性を除く）」で、死亡数は20万8,210人で1985（昭和60）年に脳血管疾患にかわって第2位となり、その後も死亡数・死亡率ともに増加傾向が続き、2018（平成30）年には全死亡者に占める割合は15.3%となっている。

第3位の死因は「老衰」で、死亡数は10万9,606人となっている。老衰は、1947（昭和22）年をピークに減少傾向が続いたが、2001（平成13）年以降、死亡数・死亡率ともに増加傾向を示し、2018（平成30）年の全死亡者に占める割合は8.0%となり、脳血管疾患を抜いて第3位となっている。

第4位の死因としては「脳血管疾患」で、2018（平成30）年の全死亡者に占める

第3図 主な死因の構成割合（2018年）



（出所）第2図に同じ。

第4図 死因順位別死亡数・死亡率（人口10万対）

死 因	平成30年						平成29年					
	死因 順位	総 数		死因 順位	男		死因 順位	女		死因 順位	総 数	
		死亡数(人)	死亡率		死亡数(人)	死亡率		死亡数(人)	死亡率		死亡数(人)	死亡率
全 死 因		1 362 482	1096.8		699 144	1156.5		663 338	1040.3		1 340 397	1075.3
悪性新生物〈腫瘍〉	(1)	373 547	300.7	(1)	218 605	361.6	(1)	154 942	243.0	(1)	373 334	299.5
心 疾 患 (高血圧性を除く)	(2)	208 210	167.6	(2)	98 027	162.1	(2)	110 183	172.8	(2)	204 837	164.3
老 衰	(3)	109 606	88.2	(5)	28 201	46.6	(3)	81 405	127.7	(4)	101 396	81.3
脳 血 管 疾 患	(4)	108 165	87.1	(3)	52 385	86.7	(4)	55 780	87.5	(3)	109 880	88.2
肺 炎	(5)	94 654	76.2	(4)	52 149	86.3	(5)	42 505	66.7	(5)	96 841	77.7
不 慮 の 事 故	(6)	41 213	33.2	(6)	23 653	39.1	(6)	17 560	27.5	(6)	40 329	32.4
誤 嚥 性 肺 炎	(7)	38 462	31.0	(7)	21 654	35.8	(7)	16 808	26.4	(7)	35 788	28.7
腎 不 全	(8)	26 080	21.0	(10)	13 230	21.9	(9)	12 850	20.2	(8)	25 134	20.2
血管性及び詳細不明の 認知症	(9)	20 526	16.5	(15)	7 378	12.2	(8)	13 148	20.6	(10)	19 546	15.7
自 殺	(10)	20 032	16.1	(9)	13 854	22.9	(15)	6 178	9.7	(9)	20 465	16.4

注：1）（ ）内の数字は死因順位を示す。  
 2）男の8位は「慢性閉塞性肺疾患(COPD)」で死亡数は15 319、死亡率は25.3である。  
 3）女の10位は「アルツハイマー病」で死亡数は12 437、死亡率は19.5である。  
 4）「結核」は死亡数が2 204、死亡率は1.8で第30位となっている。  
 5）「熱中症」は死亡数が1 578、死亡率は1.3である。

（出所）第2図に同じ。

割合は老衰よりもわずかに少ない7.9%、死亡数では10万8,165人となっている。以前は死の病といわれた結核にかわって、和暦でいえば昭和30年代から増加し始めた脳血管疾患だが、1970（昭和45）年をピークに減少しはじめ、1985（昭和60）年には心疾患（高血圧性を除く）にかわって第3位となり、その後は死亡数・死亡率ともに減少と増加を繰り返しながら、しだいに減少傾向が続いている。

その他、第5位として「肺炎」（6.9%/死亡数9万4,654人）、第6位として「不慮の事故」（3.0%/同4万1,213人）、第7位として「誤嚥性肺炎」（2.8%/同3万8,462人）、第8位として「腎不全」（1.9%/同2万6,080人）、第9位として「血管性及び詳細不明の認知症」（1.5%/同2万5,266人）、第10位として「自殺」（1.5%/同2万3,212人）の順となっている。

「老衰」という死因を除く、上位三位の「悪性新生物〈腫瘍〉」、「心疾患（高血圧性を除く）」及び「脳血管疾患」を合計すると、その割合は全体の50.6%で、死亡数は68万9,922人となっている。

このような数値から、日本人の現在の死因のほとんどは病気によるものであることが知れ、世界的にも、戦争や地域紛争に起因する死因を除くと、人間は病気によってこの地上生涯を終えることは明らかである。このことから、クオリティー・オブ・ライフ(Quality of Life ; QOL)、すなわち〈生活の質〉、ないしは、〈死の質(QOD)〉

を考えるうえで、医学や医療技術の問題は大きな要因を占めることになるといえよう。

なお、以前は3万人を超えて社会問題化していた自殺者はしだいに減少し、近年では2万人ほどとなっている。他方、警察庁によると、2018（平成30）年の交通事故死者数は3,532人で、2019（平成31）年の交通事故死者数は317人少ない3,215人と過去最少となっているが、そのうち高齢者の死者数は全体の5割以上を占めているという。

## 5. 人間の〈いのち〉の長さを考える

### 5-1. 人が〈死〉を恐れる理由とは何か

私たち人間は、「すべての人は、死から逃れられない」という現実、誰もがみずからの頭の中では理解しているものの、おそらく、この地上を去るという現実が目の前に迫り、涙を流さざるをえなかった時に、初めて真剣に自分の〈死〉と向き合うことになりそうである。

一般的に、私たちが感じている〈死〉や死後のイメージは、決して明るいものではない。

私たちの〈死〉や死後のイメージは、たとえば、非常にいやで暗いこと、そして、得体のしれない、苦しく、つらい、といったところだろうか。

このようなイメージをいなく第一の要因は、誰ひとり、〈死〉と死後の世界を前もって体験的に知ることができない、ということであろう。

すなわち、この世に生きている人間にとっては、死と死後の世界はまったくの未知なる世界である。死ねば、すべては無であり何も残らず何も感じないと主張する人たちもいる。それが本当であるなら、多少なりとも死への慰めもあるが、身体は朽ちても魂は永遠に存在すると考えている人たちにとっては、死を恐れるのは当然のことといえる。古くからいわれているように、天国と地獄の存在を確認するわけではないが、この地上生涯を終えた後に、自分の魂は天国に昇れるのか、あるいは、地獄に堕ちて永遠に苦しみ続けるのか、そのいずれかだとすれば、喜んで死ぬのを待つ者は少ないかもしれない。

たとえば、海外旅行者であれば、その旅行先の状況や出来事などについて聞くことはできるが、これまで世界中を探しても、明らかに死後の世界から帰ってきた人間は一人もいない。多方面の宗教家たちがさまざまに死後の世界について語っているものの、死と死後の世界について真に正確なことは誰一人わからない。一般的に、

私たち人間は、得体のしれない、未知なるものについては、強い恐怖感と漠然とした嫌悪感を覚える場合が多いのである。

第二に、人間の〈死〉は、予測不能であり、はっきりと自分の死の時間を知ることができない恐れである。

テレビドラマなどで、病院に入院中の患者が、医師から余命を告げられて落胆したり苦悩する場面を見ることがある。ある程度の覚悟をしているとはいえ、余命を告げられた患者が喜んでいるテレビドラマを見ることはない。自分が余命を告げられた時、それを冷静に受け止め、なんら取り乱すことはないという自信がある人間は、どれだけいるだろうか。医師から「余命三ヶ月」と告知されても、実際には二ヶ月で死に至る場合もあれば、一年以上生存する事例もあり、余命の告知すら明確な死の時間とはいえ、あいまいな部分がある。

「死は盗人のようにやって来る」という言葉もある。朝、元気に朝食を食べていた人間が、交通事故や本人も自覚していない病気を突然発症して死ぬ場合もある。このような場合は、人生の最後の時に向けて「終活」をするという時間がない。ある程度、死の予測がたてば、さまざまな身の整理や死に向けての準備を済ませることも可能であるし、そのように望みたいが、突然の死のおとずれでは、自分で何もすることがかなわない。

第三に、死までの時間、そして死ぬ時の「痛み」についてのいい知れぬ恐れやこわさである。

死ぬ本人が痛みを感じる間もなく、突然死をむかえる場合、あるいは、痛みのない、穏やかで、平安な最後の時—ただし、その心中まではわからないが—を過ごす人間もいるようである。しかし、何らかの事故やひどい病気などで死までの時間が長引いた時などは、身体的な痛みと合わせて、精神的な痛みも伴う場合もあることから、〈死〉へのイメージは決して明るいとはいえない。

第四に、〈死〉は孤独である。誰であれ、死ぬ者には、ただ一人だけでこの地上を去る寂寥感（せきりょうかん）や漠然とした不安感がうまれるであろう。

すべての人間は、家族や親族、あるいは、多くの友人や知人がいる場合でも、死ぬ時は、誰もが、ただ一人で死に向かわなければならない。それは、どこの国に生まれようと、まったく関係ない。性別や貧富の差も何の意味もなさない。まさしく、死は「孤独」そのものといわざるをえないだろう。

そして第五に、この世で得たすべてのものは、死後の世界に持っていくことができないという無念さ、くやしき、悲しみである。

地上での長い人生で築き上げてきたこと、たとえば地位、名誉、評判ないし人間

関係など、あるいはまた、一生懸命労苦して、ようやく手に入れた所有物、たとえば家、金銭、土地などを一切手放さなければならないという、無念さや悲しみである。どれほど高い地位にあって社会的に評価されている人間であろうが、どれほどの大富豪で百万長者であろうと、死後の世界ではこの世の地位は何の価値もないであろうし、金銭は一円たりとも持っていくことができないのである。

以上のとおり、筆者の思いつくままに5つの項目に整理してみたが、他には、愛する家族や親しい友人・知人など、後に残された者への心配が、死を暗いものに行っている場合もある。そのように考えると、死は、生きている人間にとって、「最大の苦悩と試練」という表現が適切なものかもしれない。しかし、だからこそ、拙稿では、人間の死を「最大の苦悩と試練」とせず、満面の笑顔で満たされた心で死を受け入れ、死に向き合い、喜びのうちにこの地上をあとにするには、どうすべきなのか、どのようにあるべきなのかを考えたいのである。

## 5-2. 「長寿」への願望 —長い〈生〉へのあこがれ—

日本では、〈死〉を深く考えたり、日常的に〈死〉を語ることは不吉だとして、会話の口にのぼることは意図的に避けられてきた。会話の中でいつか死ぬなどと語ろうものなら、縁起でもないと嫌われてしまい、いつの間にか、死や死後の世界を語ることはタブー視されてきたし、それは現代でも変わらない。

通夜や葬儀の時、会葬御礼とともに小さな袋に詰められた塩、すなわち「お清め塩」が配られることが多い。これは、古来から死を恐れ、〈死〉を「穢（けが）れた」ものとみなし、葬儀にたずさわったものは穢れを受けたため、それを塩で清めなければ日常生活に戻ることはできないという考えからきたものである。

神道では、死を穢れ（不浄）とみなして恐れの対象としたが、仏教では死を穢れとみなさないため、仏式の葬儀や告別式においては「お清め塩」は必要ないといわれているが、日本の伝統風俗では神仏を明確に区別せず行ってきたため、その名残りもあって、現在でも、ほとんどの葬儀で「お清め塩」が配られるようである<sup>15)</sup>。

ユダヤ教の律法によれば、神殿に使える大祭司は、死んだ人間とはいかなる形でも接触は許されず、非常に近い親戚であっても例外ではない。それは、大祭司自身がけががされないためであり、特別な衣服をまとい、聖別された油をぬられた者として、ぬられた後は、その儀式的聖さの状態を維持することが求められるのである<sup>16)</sup>。

また、日本の春を代表する桜は、花見時期の定番の花であり、その時期には桜の木の下で宴席を設けるなどして楽しむ者も多くいる。

しかし、一般的に、桜は〈死〉をイメージする。「花は桜木、人は武士」と語っ

たのは、有名な禅僧・一休宗純禅師であると伝えられている。花の中では、散り際の桜が美しく、武士の死に際の清さが美しい、といった意味であろう。確かに、桜という花は短い期間に美しく咲き誇って、あとはあっさり和一挙に散ってしまう、そのいさぎよさに感銘をうける日本人もいれば、「もののあわれさ」を感じる日本人もいるはずである。

どんなに金銭を積み、昼夜願ったとしても、現状では永遠にこの地上で生き続けることはできない以上、「長寿」というのは、人間として最も望ましいことであるという考えに多くの人々が賛同するであろう。

ところで、「寿命」という文字、あるいは、「長寿」という文字の「寿」という漢字は、「ことぶき」とも読み、慶事を喜び祝うことである。「寿命」は生きている人間の〈いのち〉の長さのことであるが、一般的な常識では、誰しも短命よりは長命の方を望むであろうし、短命に終えた人の葬式はなんとも悲しい。「長寿」とは長生きを祝うという意味として理解される。それが、世界的に同じことかどうかは知りえないが、少なくとも、日本人にとっては、長く生きることが祝福そのものであり、人間の目標のひとつであるというのが一般的な考え方であろう。

そのことは、次項以降で述べる「不老不死の仙薬」を探しに大船団を率いて中国を出航した「徐福（じょふく）伝説」が何よりの説得力ある内容である。この伝説を極論すれば、いつまでも若く死なないことは「善」であり、死は「悪」という思いが、知らず知らずのうちに、私たち人間の心の中に住みついているのかもしれない。

1913（大正2）年生まれの現役の美術家・篠田桃紅氏は、自身の著作『一〇三歳になってわかったこと』<sup>17)</sup>の中で次のように述べている。「この世にやり残したことはありません。責任を果たしました。ですから、『いつ死んでもいい』と心から思っている人はいないと思います。すべての人の心は代弁できませんが、それはこの歳まで生きて感じることです。『いつ死んでもいい』と自分自身に言い聞かせているだけで、生きていくかぎり人生は未完だと思います」といい、「長く生きたいと思うのは、生き物としての本能。年老いるとそうなる」と。さすがに、一人の芸術家としてこの世を生き抜いてきた篠田氏らしい、100歳を過ぎた人間の言葉は深く重たいといわざるをえない。

また、2017（平成29）年7月に105歳で死去した日野原重明氏は、自分の長寿を嬉しいと感じる最大の理由として、「あのときのあれは失敗だったなあ」ということをもう一度やり直して、自分の人生のあちこちにできたやぶれをつくらって強くしたり、あるいは、新しいことに次々にチャレンジして、自分の人生に磨きをかけ

る時間をたっぷりもらえたからである、という気持ちを述べている<sup>18)</sup>。長寿の利点や意味を問われた時、はたして、日野原氏のような、万人がうなずくような答ができるのか、筆者としては反省しきりである。

さて、日本では、かなりの長寿者といえる2人の著名人の言葉から、人間は、誰しも長寿を望むものであると考えたいが、それでは、長く生きるのではなく、「永遠に生き続ける」ことについてはどうであろうか。

永遠に生き続けることのできるチケットがあれば、すべての人間が心から手放しで買い求めるだろうか。もしかすると、永遠への生への強い願望はあっても、実際、永遠に生きることができるとなると、ある意味で困惑するのではないか、という、あらぬ疑問がわくことがある。つまり、私たちの死は圧倒的な「悪」であり、永続的な〈生〉を願うことこそが望ましい真の人間の姿であると断言できるのかどうかということであるが、ここでは、あえて眉をひそめる、このような疑問について、次項で簡潔に検討してみたい。

ただし、それは、〈死〉は身体の消滅ではあっても、その魂は身体の消滅後も何らかの形で存在し続け、決して消滅することはない、といった宗教的な視点からは離れ、あくまで、この地上での一生涯を前提においてのことである。

### 5-3. 本当に「不死」は「最善」なのか

人間にとって、「不死」こそが最善の人生なのだろうか。古来から、「不老不死」の薬を追い求めた伝説は少なくない。

その代表的な伝説が、日本でもとりわけ有名な「徐福伝説」であろう。それは、中国の秦の時代のことである。中国の秦の方士（呪術、祈祷、医薬、占星術、天文学などに通じた、一種の学者であると考えられる）であった徐福が、秦の始皇帝の命を受け、始皇帝が求めていた「不老不死の仙薬」を探しに、若い男女3千人、五穀の種子及び百工（各種技術者）とともに、大船団を率いて中国を出航したものの、二度と中国には戻ることはなく、ある異国の地で村人に慕われながらその生涯を送り、後世の人々に尊敬されている、という伝説である。

この伝説は、日本人としては大変興味深い。なぜなら、中国を出航した徐福は、その後、さまざまな苦難を乗り越えて日本にたどり着き、その地に長く滞在したとする伝承は、現在でも日本各地で語り継がれ、徐福の墓として伝えられる場所すら存在しているからである。徐福の故郷である中国江蘇省連雲港市には、徐福をまつ「徐福祠（じょふくし）」が建設され、徐福が伝説上の人物ではなく、実在した歴史上の人物としての扱いを受けている。



むろん、筆者は中国の徐福が空想上の人物なのか、実在して伝承のとおり日本に滞在したかを確認すべくもないが、人間の「不老不死の仙薬」を手に入れたという、強い願望がこのような伝説や伝承をうみだしたことは疑いえない。

筆者は、以前、筆者自身が担当する講義を受講している20歳前後の男子と女子の学生をあわせて100名ほどに協力してもらい、「あなたは、何歳まで生きていますか」という、かなり答えにくい質問項目を設けた“ミニ・アンケート”を行ったことがある。この質問項目は、当然、いま青春を謳歌している学生たちなら、“できるだけ長く生きてみたいと願っているだろう”という、筆者の個人的な予測を裏づけるために考えたものである。

しかし、そのアンケート結果をみて非常に驚かされたのである。確かに、アンケートで、“できればいつまでも生き続けたい”、とする内容の回答はあったが、そのような回答はごく少数で、全体としては70～80歳代という回答が最も多く、実際の日本人の平均寿命よりもやや低い年齢にとどまっていた。筆者は、人生の〈夏〉の時期がスタートしたばかりの年齢にある学生なら、当然、長寿を願う学生が多いはずだとばかり考えていたことから、予想外の結果にかなり驚いたと同時に、もしかすると、現代の若者にとっては、必ずしも、“長生きすること＝素晴らしいこと”、とは考えていないのではないかと認識を新たにしている。

イエール大学の哲学教授・シェリー・ケーガン（Shelly Kagan）氏は、次のような興味深い指摘を行っている。「ここで心に留めておくべき肝心な点は、不死の人はただとても長い時間生きるのではなく、並外れて長い時間生きるのでさえなく、文字どおり永遠に生きるということだ。そして、永遠にやりたいと思えるようなことを考えつくのは、とても難しい、いや、不可能だと思う。」「私もタイ料理が好きだが、毎日、毎日、何千年も何万年も何億年も何兆年もタイ料理を食べるといふ見通しは、魅力的には感じられない。むしろそれは、一種の悪夢のように見える」と<sup>19)</sup>。経験したことのない仮想の世界について想像するのは簡単ではないが、確かに、決して終わりのない永遠の時間の中で、いつも退屈しない、魅力的な人生を四六時中考えるのは、ケーガン氏の指摘どおり、かなりの苦痛を伴いそうである。

もしかすると、〈死〉というのは、私たち人間が生きていれば享受できる楽しく、良いことがはく奪されてしまうと考えることもできるであろう。しかし、私たち人間が長く生きて、年を重ねれば重ねるほど、人生は楽しく良いことばかりになるのだろうか。仮に、もし、そうであるとするならば、確かに、人間の〈死〉は望まぬ「悪」といえるかもしれない。

ご存じのように、仏教では、人生＝幸福とは説いていない。むしろ、人間が味わ

う苦しみを8つに分けて、それを「四苦八苦」と教えている<sup>20)</sup>。

四苦は、「生苦」、「老苦」、「病苦」、「死苦」からなり、八苦とは、「愛別離苦（あいべつりく）」、「怨憎会苦（おんぞうえく）」、「求不得苦（ぐふとっく）」、「五陰盛苦（ごおんじょうく）」をいう。まず、愛別離苦は愛する人や物と別れなければならぬ苦しみである。怨憎会苦はうらみにくんでいる人と会わなければならないという苦しみである。求不得苦は求めている物や財、名誉や地位などが得られないという苦しみである。そして、最後の五陰盛苦とは何か。「五陰」は肉体のことで、肉体あるがゆえの苦しみをいい、それ以外の7つの苦しみが総括されたものと理解されている。このような愛と憎しみに満ちたこの世に長く生きることが、果たして、ますます幸せになれると断言できるであろうか。

また、『聖書』の「伝道者の書」では、「光は心地よく、日を見ることは目に快い。人は長い年月を生きるなら、ずっと楽しむがよい。だが、闇の日も多くあることを忘れてはならない」（新改訳2017年版 第11章7節～8節）<sup>21)</sup>と示している。

いずれにしろ、以上のことから、長い人生が喜びだけに満ちており、「不死」が絶対的な「善」とする考え方は、議論の余地を残しているといえよう。

なお、一こと付言すれば、私たち人間に〈死〉がなければ、この拙稿を執筆する必要性はまったくない。人間が永遠に生き続けるのであれば、〈死の質〉をめぐる検討はなんら意味も価値も見いだせず、〈死〉への覚悟も不必要だからである。

## [注]

- 1) 本書の光文社編集部によれば、本書は未完のまま手塚氏が急逝したため、テレビや雑誌などでの発言と故手塚氏の二本の講演録原稿の一部を加えた旨の記載がある。日本人であれば、いわゆる「手塚作品」を知らぬ者はいないだろう。なお、引用箇所にある「高度情報化社会」という文言の意味内容と私の著作の「高度情報社会」の意味内容は、ほぼ同じ意味内容と考えている。
- 2) アルフォンス・デーケン『死とどう向き合うか』、NHK出版、平成23年、224頁。デーケン氏は、本書の中で、死を教える時、①知識のレベル、②価値観のレベル、③感情のレベル、そして④技術のレベルという4つの観点から考えられると述べている。ドイツ人である氏は、日本で初めて〈死生学〉という概念を定着させた研究者として知られており、死生学の実践としての「死への準備教育」に関しては、氏の著書『生と死の教育』なども参考にされたい。また、ユーモアと笑いの効用についても紹介しており、著書に『ユーモアは老いと死の妙薬』や『よく生きよく笑いよき死と出会う』など、また編著書が多数刊行されている。
- 3) 真にあわれみに満ちた、やさしく、なごやかなうるわしい心が編み出す深い愛情は、人間以外には持ち得ないといわれている。もし、自分自身が愛されていないと勘違いする人間の根本原因には、自分自身を真から愛しているかどうかという疑問がある。カウンセリングや人間の心理研究者の幾人かが、愛されていないと思う多くの人たちは、心の深い部分で自分自身を認めず、愛していないのだ、と指摘している。いつの間にか、自分のありのままの姿を受け入れ

- ることができず、自分で低いセルフ・イメージ（自己像）をつくってしまったために、愛を受けるに足る存在ではないと、まさしく「勝手に」思い込んでいるとすれば、本当に悲しいことといわざるをえない。
- 4) 2012（昭和24）年5月、ノルウェー出身の画家で、ノルウェーの国民的な画家として知られるエドヴァルド・ムンク（Edvard Munch）の有名な『叫び』がオークションにかけられ、当時史上最高額の1億1,990万ドル（手数料込。日本円で約96億円）で落札され、大きなニュースとなった。この絵画の買主は公表されていない。
  - 5) 野村祐之「死の覚悟からの生還—肝臓移植を受けて—」A.デーケン・飯塚編『新しい死の文化をめざして』、春秋社、平成7年、200—201頁。
  - 6) アンネ・フランクが書いた日記は、1947（昭和22）年に“Het Achterhuis”（オランダ語で「後ろの家」という意味）というタイトルで出版され、現在では60ヶ国以上の言語に翻訳されているという。アンネは、1945（昭和20）年3月上旬にわずか15歳の若さで亡くなるが、その数週間後の4月12日に、アンネの収容されていたベルゲン・ベルゼン収容所はイギリス軍の手によって解放されている。なお、ナチスによるユダヤ人虐殺では約600万人のユダヤ人が犠牲となり、そのうち150万人は未成年の子どものと伝えられている。
  - 7) 稲盛和夫『生き方』、サンマーク出版、平成16年。
  - 8) 柏木哲夫『生きること、寄りそうこと』、いのちのことば社、平成24年、125頁。
  - 9) この実話は、同上書、59—60頁で紹介されている。
  - 10) 渡辺氏がノートルダム修道女会に入会し、アメリカのボストン郊外の広大な修練院で修行していた一年間のある日のこと、修練長が、「時間の使い方は、そのままいのちの使い方なのです。同じ仕事をするなら、やがて夕食の席につく1人ひとりのシスターのために、祈りながら並べてゆきなさい」と優しくさとしたという経験を著書『面倒だから、しょう』の中で紹介している。なお、渡辺氏は、ノートルダム清心学園理事長の職などをつとめ、2016（平成28）年12月30日に逝去している。
  - 11) 厚生労働省「平成30年簡易生命表の概況」  
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life18/index.html> より。
  - 12) この「カゲロウ」と「ミノムシ（オオミノガ）」の生態については、稲垣栄洋『生き物の死にざま』、草思社、令和元年を参照している。
  - 13) この点については、拙稿「人生の四季に関する散策的思考—人生の春夏秋冬を生きる—」実践経営学会関西支部会編『関西実践経営』（実践経営学会関西支部会誌）、第56号、実践経営学会関西支部会、平成30年、33—44頁を参照されたい。
  - 14) 厚生労働省「平成30年（2018）人口動態統計月報年計（概数）の概況」  
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai18/index.html> より。
  - 15) また、日本では、塩を三角すいの形に盛って玄関先や各棚に置く「盛り塩」という風習がある。その由来については諸説あるが、神道の塩は穢れをはらうという言い伝えにのっとり、その場の邪気を除いて空気を清めるために置かれるともいわれている。このような「盛り塩」の風習は、現代においても行っている家庭があり、筆者も友人宅などへの訪問時に、玄関先でみかけることがある。
  - 16) 「旧約聖書」の「レビ記」第21章第10節～12節に、「兄弟たちのうち大祭司で、頭に注ぎの油が注がれ、任職されて装束を着けている者は、その髪の毛を乱したり、その装束を引き裂いたりしてはならない。いかなる死人のところにも入って行ってはならない。自分の父のためにも母のためにも自分の身を汚してはならない。聖所から出て行って神の聖所を冒してはならない。神の注ぎの油による記章を身に着けているからである。わたしは主である」（『聖書』、新改訳 2017年版） とするされている。

- 17) 篠田桃紅『一〇三歳になってわかったこと―人生は一人でも面白い―』、幻冬舎、平成27年。
- 18) 日野原重明『十歳のきみへ―九十五歳のわたしから』、富山房インターナショナル、平成18年。
- 19) この興味深いシェリー・ケーガン氏の言葉は、シェリー・ケーガン著・柴田訳『『死』とは何か〔日本縮約版〕』、文響社、平成30年、157-158頁を参照されたい。
- 20) むろん、だからといって、仏教では人間は苦しむだけの人生を過ごすために、この地上に生まれてきたわけではなく、人間には生まれた目的があると教えている。
- 21) 「旧約聖書」の「伝道者の書」では、このあと、「すべて、起こることは空しい」（『聖書』、新改訳 2017年版）と続いている。

#### 〔主要参考文献〕

- アルフォンス・デーケン『ユーモアは老いと死の妙薬』、岩波書店、平成7年。  
アルフォンス・デーケン『生と死の教育』、岩波書店、平成13年。  
アルフォンス・デーケン『よく生きよく笑いよき死と出会う』、岩波書店、平成15年。  
アルフォンス・デーケン『死とどう向き合うか』、NHK出版、平成23年。  
稲垣栄洋『生き物の死にざま』、草思社、令和元年。  
稲盛和夫『生き方』、サンマーク出版、平成16年。  
上田紀行『かけがえのない人間』、講談社現代新書、平成20年。  
柏木哲夫『生きること、寄りそうこと』、いのちのことば社、平成24年。  
篠田桃紅『一〇三歳になってわかったこと―人生は一人でも面白い―』、幻冬舎、平成27年。  
シェリー・ケーガン著・柴田訳『『死』とは何か〔日本縮約版〕』、文響社、平成30年。  
新日本聖書刊行会訳『聖書』（新改訳 2017）、いのちのことば社、平成29年。  
手塚治虫『ガラスの地球を救え―二十一世紀の君たちへ―』、光文社、昭和64年。  
トルストイ、西本訳『人生論』、社会思想社、昭和41年。  
野村祐之「死の覚悟からの生還―肝臓移植を受けて―」A.デーケン・飯塚編『新しい死の文化をめぐって』、春秋社、平成7年。  
日野原重明『十歳のきみへ―九十五歳のわたしから』、富山房インターナショナル、平成18年。  
村上則夫『地域社会システムと情報メディア〔三訂版〕』、税務経理協会、平成17年。  
村上則夫『社会情報入門―生きる力としての情報を考える―』、税務経理協会、平成21年。  
村上則夫「地域社会の再創造のあり方をめぐる思索―心豊かなまちづくりの考え方とその方向性―」実践経営学会関西支部会編『関西実践経営』（実践経営学会関西支部会誌）、第51号、実践経営学会関西支部会、平成28年、23-34頁。  
村上則夫「人生の四季に関する散策的思考―人生の春夏秋冬を生きる―」実践経営学会関西支部会編『関西実践経営』（実践経営学会関西支部会誌）、第56号、実践経営学会関西支部会、平成30年、33-44頁。  
渡辺和子『面倒だから、しよう』、幻冬舎、平成25年。  
渡辺和子『あなたはそのまま愛されている』、PHP研究所、平成30年。

#### 〈参考サイト〉

厚生労働省「平成30年簡易生命表の概況」

<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life18/index.html>

厚生労働省「平成30年（2018）人口動態統計月報年計（概数）の概況」

<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai18/index.html>

日本経済新聞電子版「100歳以上の高齢者、20年間で6.7倍に 西日本に多く」（2017.9.15）

[http://www.nikkei.com/article/DGXLASDG15H8O\\_V10C17A9EA1000/](http://www.nikkei.com/article/DGXLASDG15H8O_V10C17A9EA1000/)